

野口薪能 四番目

とうもん やつこ
東門奴

素材 各務原市蘇原に伝わる東門奴の怪談

主題 武家に利用され、無実の罪で殺された農民の無念

人物 シテ 東門奴(農民の霊)

ワキ 旅人 (宝暦義民の末裔)
ほうれきぎみん まつえい

場面 幕末 夏は袖合月(七月)の夜 境川の土橋のたもと
そであいつき どぼし

(ワキ 旅人)

〔名乗り〕これは宝暦義民の末裔にて候。
ほうれきぎみん まつえい そうろう

郡上一揆のこと

しつよう せんぎ
執拗な 詮議を逃れ 旅の空 暗い夜道を 急ぐなり。

き
斬りつけられて 川に落ち、水に流れて 這い上がる。
は

しも
川の下なる この里に 志 ある ご仁あり。
こころざし じん

安積家のこと

あいきつ
せめて挨拶 致さむと、 岸边に立ちて 遙かなる
はる

なが
橋のたもとを 眺めれば、 闇夜に揺れる 方がおり、
かた

やみよ ゆ
闇夜に揺れる 方がおり。

安積家は当時の義民ネットワークを担っておられた

(シテ 東門奴)

〔次第〕 風も途絶えて夜が更ける、 風も途絶えて夜が更ける、
とだ ふ とだ ふ

語る声なく 淋しき。

〔名乗り〕 そもそもこれは 名もなき奴の靈なり。さてもここは
美濃の国なる蘇原郷 外山のふもとの東門と申す村なれば、われを
東門奴と人は語り候。

ぬばたまの 闇夜に沈む 魂の 声も聴こゆる この静けさや。

思えばあれは 文政を わずかに下る 武家の世に
旗本陣屋に 命じられ 上納金を 集めけり。

一日歩き 苦勞して 屋敷に戻れば 突然に
白き刃が 降りかかり 無念の闇に 落ちにけり。

武家の都合で 殺められ、 あらぬ罪科を 着せられた、
成仏できぬ 魂が、今も闇夜を 彷徨えり、
今も闇夜を 彷徨えり。

（旅人）
星か蛍か 漆黒の、 闇夜に揺れる あなた様、

時の無き世の お姿に、 思わず足が 竦めども、
袖すり合うも 多生の縁。 畏み声を 掛けまする。

（東門奴）
時の無き 闇夜に揺れる わが姿 現世の者に なぜ見える。

（旅人）
心の底に 沈みたる 辛く悲しき 火の玉は

礼を表す 赤き色 静かに揺れて 光ります。 赤川礼は、陰陽五行説
何か探して おいでなら、通りすがりの 縁にて、
共にお探し いたします。

(東門奴)

闇に落ちたる その理由を、理由を探して おるとこじや。

ところで其方は 何者か、通りすがりの 縁にて、
探してくれと 申される、その出で立ちや 凄まじき
旅の姿に 身を窶し、暗き夜道を 急ぐ人。
巡礼か山伏か

(旅人)

その昔 連判状に 名を連れ 伝馬町にて 石を抱き
冷たき牢に 露と消ゆ 名も無き者の 形見なり。

石を抱き 拷問の一

(東門奴)

宝曆義民の 末裔か。

(旅人)

身に余りたる その言葉、その名を聞けば 懐かしく、
心に懐く 温石に 胸が滾りて 温まり、
ひもじい思いが 消えまする。

懐石料理の由来

(東門奴)

それで合点が 行きにけり。

血のつながりは 薄くとも、志にて 生きるなら

色しき即そく是ぜ空くうの 理ことわりに 時ときを 超こえても めぐり合あう。 般若心経の思想
見みつけてくれよう 其そなた方なたなら、闇やみに 落おちたる この 理わけ由ゆを。

思おもえばあれは 侍さむらいの 奴やつこと 呼よばれし 身み分ぶんにて、 奴奴下下男男
主しゅ家の 使つかいで 東とう門もんの 瓦かわら焼やきたる 百ひやく姓くしやうを
責せめて集すうめた 数すう貫かん文もん。 疲つかれた足あしで 持もち 帰かえり 一い貫かん文もんは一い

出いすやいなや 白しら刃はにて 理わけ由ゆも 分わかからず 斬きられけり。

ただ 侍さむらいが その 時ときに 上じやう納のう金きんを 落おしたと
叫さけぶ 言げん葉が 気きにかかる。

(旅人)

責せめて集すうめた 数すう貫かん文もん 落おして 気きづかぬ 理わけ由ゆも ない。
理わけ由ゆも 分わかからぬ その 理わけ由ゆは 武ぶ家けの 都と合がと 錢ぜの 性さが。
他た人にんの 錢ぜで 飲いみ 食くいし 色いろと 欲よくと 目めが くらみ
奴やつこが 盗ぬすんだ こと して 帳ちやう簿ぼの 穴あなを 埋うめ 合あわせ
錢ぜは 己おのれの 懐ふところに 濡ぬれ 手あわに 粟あわで 仕し舞まい 込こむ。
武ぶ家けの 都と合がは 一いつ の 世せも 変かわらぬ 物ものと 思おもい 知しる。

(東門奴)

そうであつたか 浅あさましや。

(旅人)

ああ 浅あさましや 浅あさましや。

(東門奴)

智慧ちえまだ浅わかき 若わかき身みは 夢うつつか現まぼろしか 幻まぼろしか。

武家やっこの奴やつこに 取り立もちてて 貫もちえることと 喜よろこびて

辛つらき仕事しごとに 身みを削けずり、いつか世よに出て 父ちちはは母ははを

喜よろこばせんと 夢ゆめを見る。 拳あげく句くの果はてが 白しろ刃はにて

罪つみを着きせられ 口くちぶちう封ふうじ。

その因いんねん縁えんで 魂たましいが この世よを彷徨さまよう こととなり。

(旅人)

罪かぶを被かぶせて 斬ちやうぼり殺つし 帳簿つくるを繕つくい 銭ぜにを取とる。

色いろと欲よくとで 目めが眩くらみ 一いっせき石せき二に鳥ちようの 悪わる巧たくみ。

だがそれだけで 若わか者の 命いのちを取とるには 軽かろすぎる。

他ほかに仔しさい細さいがあるのでは。

(東門奴)

心こころ当たりを 尋たずねれば つい先まごろの ことなれど、

主家しゆけの密ひそかな 逃あつらえで、二ふたつの枡ますを 拵こしらえり。

詭こ || 注文

(旅人)

二ふたつの枡ますの 拵こしらえは、外そとは同じで 中なかは別わか。

(東門奴)

どうしてそれが 分わかるのじゃ。

(旅人)

武家ぶけの都合つごうは いつの世よも 変かわらぬものと 思おもい知る。

たてよこたか
縦横高さは 同じでも 底の広さが 違う枱。
大きいものが 買い枱で 小さいものが 売り枱じゃ。

(東門奴)

そういう理由が あったのか。 なまじ器用な この手にて
禍となる 二つ枱、 それを作らせ 時をみて
手打ちにいたし 口封じ。 今更ながら 臍を噬み、
闇に彷徨う その理由を、 ようやくここに 悟りけり、
ようやくここに 悟りけり。

噬臍 〓 後悔

(旅人)

悍ましや あな悍ましや 悍ましや …。
いずこも同じ 侍は 己の欲で 人を斬る。

大義を語る 武家の世の 末路がここに 極まれり。
名分騙る 侍の 都合で死ぬは 哀れなり。

朱子学の大義名分論

(東門奴)

哀れというも 愚かなり。

(旅人)

愚かというも、 不憫なり …。

(東門奴)

星辰廻る 美しき 天は気高く 無情にて、
命 育む 慈悲深き 大地は固く 否を示す。

易の天地

否は否塞にて 窮まれり。 道窮まれば 人変ず。

人変ずれば これ通ず 風吹き荒び 山険し、
仇に耐えて 漸くに 久しき道を いぎ進まん。

天地人の三才
人又変じて風山漸

(旅人)

人は無力な 葦なれど 折られる身にも 意地があり。
見捨てられし この方を 救えぬまでも 寄り添わん。

(東門奴)

宝曆義民の 末裔は 糧にて生きる 者ならず。
名にて生きる 者と聞く。

(旅人)

伝馬町の 抱き石が 身を温める 温石に
変わる不思議の 懐石に ひもじい思いを 忘れます。

(東門奴)

名が苦しみを 温めて 誉に変える この不思議
不憫なりける 魂も、 その名を呼ばれ 暗闇に
星のごとくに 輝きて、 螢のごとく 漂えば、

(旅人)

村の子供を 導けり。

(東門奴)

そのことが 生きて証に なりぬれば、
どうかわが名を 永久に、 悲しきその名 その理由を
導きとして 世のために 伝えて欲しや 其方から。

(旅人)

く すじょう
奇しき素性の身なれども、てん みぶん
天は身分を 選ばれず。
めい かしこ つつし
命を畏み 謹みて、そなた おな
其方の御名を 伝えます。

(東門奴)

かたじな
忝なくも 有り難や。袖合月と 呼ぶ月の
はし
橋のたもとで 邂逅い、袖振り合うも 縁かな。
めぐりあ そでふ
えにし

袖合月 〓 陰曆7月

(旅人)

えにし
縁と聞けば 懐かしや。なむあみだぶつ て
じゃくがじょうぶつじつぼうせかい ねんぶつしゅじょうせつしゅふしや
若我成仏十方世界、念仏衆生攝取不捨。
節 観無量寿経の一

ぼだい とむら
ここに菩提を 弔いて 武家の末路を 見届けん。

(東門奴)

うどんげ
優曇華の花にも似たる 珍しき
めずら
優曇華 〓 三千年に一度咲く花

えにし
縁に引かれ 今宵会う。東の空が 白む今
そなた

そなた
其方と会えた 喜びが 闇を照らして 満ちてゆく。

こよい
今宵の出会いを 花向けに 其方に菩提を 弔われ
はなむ そなた ぼだい とむら

めいど
冥途の旅にいざ立たん。冥途の旅にいざ立たん。
めいど

完

ながた ひさよ
永田 久代 伝

てらだ じゅういち
寺田 重市 伝

てらだ せいち
寺田 誠知 記

